

## ●音楽通じ地域ひろく

師走の町に毎年、歓喜の歌声が響く。一九八六（昭和六十一）年の第一回から年末に欠かさず開かれている「のべおか第九演奏会」。今では、すっかり延岡市の風物詩として定着している。

演奏会は「のべおか第九を歌う会」と九州交響楽団の共催。会場は延岡総合文化センター。当日はまず九州交響楽団がベートーベン作曲の「交響曲第九番ニ短調」の一二楽章までを演奏。

そのあとハイライトが第四楽章。ソプラノ、アルト、テノールの独唱に続いて、歌う会のメンバーが「友よ、この歌ではなくもつと楽しく喜びに満ちた歌を歌おう…」とドイツ語で大合唱。客席からは「ブラボー」の声飛び交い、歌い手と会場が一体となってクライマックスを迎える。

事の始まりはもちろん、市民手づくりの企画による音楽文化の向上にあったが、一方で当時



迫力十分の歓喜の歌。会員の熱意が公演を支える

経済面で地盤沈下が加速していた工都・延岡の町に、歓喜の歌声で元気を取り戻そうという狙いもあった。延岡市教育委員会、同文化センターなどが年の瀬に親しまれている「ベートーベンの交響曲第九番」を歌う集いを企画したところ、予想以上の反響で一回目は日向市、高千穂町などからも四百人を超す参加者があった。

以来、これまで休むことなく十七回開催。毎年、五月末か六月初めに結団式を行い、土、日曜日を中心に月三回ほどの練習を重ね、本番に備える。

参加者は年ごとに変動があるが、最近では百五十人前後で固まっている。

現在の会長は三代目の吉村勤さん（七〇）。第一回から皆勤の会員もいる。吉村さんは十一回から参加しており、「これまで個人的には、完全に歌えなかったことは一度もない。その意味で

第九は挑戦しがいがある。みんなと力を合わせ、維持発展させていきたい」と語る。

二〇〇〇（平成十二）年には延岡フィルハーモニー管弦楽団と一緒に、延岡市の姉妹都市である米国・メドフォード市を訪れ、公演した。訪問団は総勢二百五十人。同年八月二十四日の公演には米国の声楽家も加わった。迫力十分の「第九」の大合唱にメドフォード市民は総立ちで拍手を送り、両市の交流に貴重な足跡を残した。

〇二（同十四）年の第十七回公演にはその時の米国人声楽家三人もソリストとして特別参加。音楽を通じた地域づくりに「第九を歌う会」が果たした役割は大きい。

南村正明